

大阪は「まち」がほんまにおもしろい

古代港・桑津に眠る、麗しき髪長媛のものがたり

～日向国に嬢子有り。名は髪長媛～

昭和初期、桑津小学校の工事現場から約1万年以上前の縄文時代前期の石鏃が見つかりました。仁徳天皇の后・髪長媛の伝説や、環濠集落の跡地、大坂の夏の陣の慰霊塔など、古代、中世、近世と、物語の宝庫です。大阪でも最も古い歴史を持つ桑津のまちを、探索してみましょう。



① 東部市場・百済駅

古代はこの辺りは、朝鮮半島から渡来した先進的な人達が住み、百済部といわれていました。明治中頃は北百済村と称され、関西本線の百済駅がありました。百済駅は戦後廃止されましたが、住民の要望で1989年に同じ位置に東部市場駅が設置されました。東部市場は正式には大阪市中央卸売市場東部市場で大阪市中央卸売市場の1つです。中央卸売市場が過密状態となったので打開策として1964年に東住吉区に東部市場が開設されました。青果・水産物とその加工品を扱い、主に大阪府東南部を中心に他府県にも出荷し、取扱高全国第9位の大規模集積市場です。東部市場の開設とともに貨物線の百済～東部市場が開業しましたが、トラック輸送に代わられ1984年、貨物線は廃止されました。

② 杭全交差点(5差路)

「杭全」…どう読みますか？大阪の難読地名の1つです。平安時代は平野区域は杭全庄と呼ばれ、摂関藤原氏の荘園でした。杭全交差点は市内でも有数の5差路交差点です。かつてはロータリーでしたが、昭和35年(1960)に信号機が設置されロータリーがなくなりました。奈良街道(国道25号)、今里筋(森小路大和川線)、美章園街道が交差しています。横断歩道が無いので、昭和43年(1968)に珍しい五角形の歩道橋が設置されました。自転車及び車椅子等のスロープが設置されていません。また信号機設置場所まで320メートルもあって、長距離の迂回を余儀なくされます。

③ 奥村橋石碑

杭全交差点から奈良街道を西へ行くと今川と駒川が並行して南北に流れます。平野から四天王寺方面へ通じる道を川が遮るので、駒川に奥村橋が架けられました。橋は江戸時代のもので、橋のたもとに石碑が建っています。「嘉永6年、奥村本家林右衛門、隠居して道清、88歳米寿の内祝いに、私財で石橋を寄付。お上は、奇特なこととして特に橋名に奥村と入れることを允許(いんきよ)と銘されています。大阪は八百八橋と謳われましたが、その多くは町人が社会のため寄付して架けました。

④ 五輪橋と柴田権十郎の五輪塚

桑津3丁目付近の駒川にかかる橋で、近くに五輪塚があるので「五輪橋」と命名されています。大坂夏の陣では桑津は激しい戦場となり、この地では徳川家康に江戸城留守居役とされ動けなかった福島正則に替わって豊臣方に付いた侍大将・柴田権十郎正俊と、徳川方の蜂須賀九郎右衛門が死闘を繰り広げました。結局、権十郎が九郎右衛門の首を討ち取りますが、自らも重傷を負い、自刃しました。住民が2人の供養をし、2つの五輪塚を建立しましたが、1基(九郎右衛門墓)は行方不明となっています。

⑤ 桑津環濠集落

戦乱が多かった中世以降、町や村は周囲を水濠や竹藪を巡らし自衛しました。桑津もそうした環濠集落で環濠は昭和初期まで、およそ400年間残っていました。環濠の目的は自衛の他、保水灌漑、洪水対策などです。外部に通じる道は北に2カ所、南に1カ所、西に1カ所の計4カ所だけで、現在でもその地名として桑津北口・桑津南口などが残っています。入口には木戸が設けられ夜間は閉ざされ、村落内の道は細く先が見えないように屈曲したり、袋小路になっています。四辻も見通しが利かないように作られていて入って来たよそ者をまどわすように作られています。村の南側の突出部は侵入者に対して横矢をかける目的でつくられたと思われる。木戸口にまつられていた地蔵尊が今も残されています(北口地蔵)。

⑥ 桑津天神社(髪長媛伝説)

「日本書紀」によると応神天皇が日向の国から美女の誉高い髪長媛を召され、桑津に住ませたと記されています。媛はのちに仁徳天皇の妃となりました。その後、髪長媛の宮跡に金蓮寺が建てられ、応神天皇とともに八幡宮でまつられていましたが、明治の神仏分離で桑津天神社に遷されました。桑津天神社の主神は少彦名命で、これは髪長媛が病にかかった時に医薬の祖神・少彦名命に祈願して全快した縁故で祀られたと伝えられます。髪長媛は機織りの名手で、背丈以上の黒髪であったのでこう呼ばれたといわれています。桑津の地名は古代、桑の木が多い津(河内が内海であった時の港)に由来しますが、今も名残の桑の木があります。桑の葉で蚕を育て、繭から絹が作られます。髪長媛が機織りの名手であったことは、この地が古代から絹織物と深い縁があったことを想像させます。境内には大坂の陣で戦没した将士の慰霊碑があり、桑津で豊臣方と徳川方の激しい闘いがあったことを偲ばせます。

⑧ 今川

狭山池を源流とする西除川の下流部です。大和川付替え以前は水量も多く灌漑に使われましたが、付替え以降は水量が足りなくなりました。現在は平野下水処理場の処理水が流れて水質も改善。野生化した鯉や亀が大きく成長して生息しています。また万葉集に「鳩鳥(ニホドリ)の息長川(オキナガガワ)は絶えぬとも君に語るむ言(コト)尽きぬやも」と詠まれた息長川は、この今川であるという説が有力になっています。今川の堤はうるし堤とも呼ばれ、江戸時代漆器の原料として、うるし栽培が奨励され、秋には美しい紅葉の名所でもありました。現在は桜とユキヤナギの花の道となり、3キロメートルに及び桜並木は大阪市内有数の桜の名所となっています。

⑨ 嫁そしり堤・這いあがり堤

大和川付替えが行われるまで、桑津から東方には駒川、西除天道川、西除今川の3つの川が近接した間隔で北上し、堤が三重の堀となっていました。大坂夏の陣には平野で負傷した兵士が逃げ込むのに格好な場所ので、今川の堤をやっとの思いで這い上がったことから「這いあがり堤」といわれました。また江戸時代に入ると大阪から平野の大念仏寺に参詣する老婆たちが、この堤まで来ると、付近に人がいないために嫁の不平等や不満を安心して語り合い、そこから「嫁そしり堤」という名前がつけられました。また明治初年頃まで桑津名物「しんこ餅」を売る二軒茶屋がありました。

⑩ 開高健の家

芥川賞、菊地寛賞などを受賞した開高健は天王寺区上本町に生まれ、7歳の時に北田辺に転居し、少年・青年時代を過ごしました。大阪市大在学中に創作活動を始め、壽屋(現在のサントリー)に入社してコピーライターとして才能を発揮。豊富な読書量に支えられた独創的な文章表現、自分の目で確かめる行動力、食欲旺盛なグルメマン、大魚・珍魚を追う釣り人、冒険家としての側面など、開高文学は多彩な要素が含まれていますが、その創作活動の原点は、貧しく飢餓の時代を過ごした北田辺での原体験にあります。北田辺には育った家と、駅前に文学碑があります。碑には自伝的小説「破れた繭」から取られた、当時の北田辺の風景と、開高の体験と性格を表現した文章が書かれています。(以上のスポット解説文は「東住吉100物語」などを参考にしました。)



⑦ 桑津遺跡

昭和4年(1929)、桑津小学校の工事現場から弥生時代の土器や石器が出土。その後の発掘調査で周辺地域から縄文時代前期の石鏃なども見つかり、桑津に人が住み始めたのは約1万年以上前にさかのぼると判明しました。また古墳、飛鳥、平安、中世、江戸の各時代の石器、土器、集落跡、建物跡なども出土し、複合遺跡であることが判明しました。平成3年(1991)、廃井戸の底からわが国最古の「呪符木簡」が発見され、大きなニュースになりました。

大阪あそび歩のコースは約2~3km、2~3時間程度を基準として作成されています。